

# 令和2年産 果樹情報（第6号）

令和2年9月18日  
宮城県大河原農業改良普及センター

- ・ 日本なしやももは、収穫後の防除を必ず実施しましょう。

## 1 気象経過

8月のアメダス白石地点における旬別平均気温は平年より0.2~3.0℃高く、降水量は平年より少ない状況でした。

9月上旬は、旬別平均気温が平年より2.9℃高く、降水量が平年比198%と多い状況です。

表1 アメダス白石地点における8月から9月の気象経過

月	旬	平均気温（℃）		降水量（mm）		日照時間（時間）	
		令和2年	平年差	令和2年	平年比（%）	令和2年	平年比（%）
8	上旬	24.5	0.2	33.5	60	52.5	105
	中旬	26.7	3.0	8.5	14	82.9	201
	下旬	25.1	2.0	14.0	17	61.8	124
9	上旬	24.7	2.9	110.5	198	29.0	76

## 2 果樹作況調査ほの果実肥大状況

果樹作況調査ほにおける果実肥大は、りんごのふじが平年より小さく、なしの豊水が平年より大きい状況です（表2）。

日本なしの豊水の収穫始期は、平年より角田市が9月8日で4日早く、蔵王町が9月14日で2日早い状況です。

表2 9月9日 果実肥大状況（単位：mm）

樹種	品種	地点	令和2年		令和元年		平年値		平年比（%）	
			縦径	横径	縦径	横径	縦径	横径	縦径	横径
りんご	ふじ	白石・郡山	69.3	76.6	73.4	79.9	73.5	78.6	94	97
		角田・豊室	76.7	91.9	79.9	94.9	75.9	88.1	101	104
なし	豊水	蔵王・高木	77.4	90.9	77.6	90.1	75.9	87.6	102	104

## 3 樹種ごとの管理

### （1）りんご

#### イ 中晩生品種の着色管理

- ・ 葉摘みは中生品種で収穫の約25日~30日前、晩生品種で収穫の約30日~40日前までそれぞれ2回程度に分けて実施します。
- ・ 晴天の早朝に葉摘みを行うと果実の温度が急に上がって日焼けを起こしやすいため、出来るだけ果実温度の上昇した日中に実施します。

## □ 病虫害防除

### ・ ハダニ類

病虫害防除所から防除情報第 6 号が令和 2 年 8 月 28 日に発表され、ナミハダニの発生が多くなっています。園地をよく見回り、ハダニ類が 1 葉あたり 3 頭以上寄生している場合は薬剤防除を実施します。

## (2) 日本なし

### イ 豊水、あきづき、新高の収穫

- ・ 豊水は、適熟期の収穫に努め、同一樹でも主幹から 2m 以内の果実は熟期が遅れるので数回に分けて収穫します。ただし、過熟果は市場へ出荷できないので、収穫遅れのないよう注意します。
- ・ あきづきは、地色が見分けにくいので、果実全体が赤褐色になり、ていあ部に緑色部分が一部残った状態で収穫します。
- ・ 新高は、樹冠外周部に着果した果実や大果を優先して収穫します。

## □ 病虫害防除

### ・ 黒星病

幸水では黒星病が多発した園地も見られましたが、豊水以降の品種にも発生が確認されています。発病した果実は二次伝染源となるので見つけしだい取り除き、ほ場に放置せず地中に埋めるなど適切に処分します。

翌年の感染を減らすためには、秋季防除と落葉処理が非常に大切です。

#### <秋季防除>

芽のりん片への感染を予防するために行います。

時期は、りん片生組織が露出する時期から落葉率 80% までの時期 (11 月上旬頃まで) に、2 回は確実に実施します。果実が残っている場合は、薬剤の収穫前日数や薬害の発生に注意します。

薬液量は 10 a 当たり 300 L を確保し、散布むらのないよう園地の隅々まで丁寧に散布します。

#### <落葉処理>

被害落葉は翌年の重要な第一次伝染源となるので、ほ場内の落葉は、土中に埋めるなど適切に処分します。また、すき込み、草刈機による粉碎だけでも効果が期待できますので、確実に実施します。

表 3 秋季防除に使用するなしの黒星病に登録のある薬剤(一部抜粋)

薬剤名	有効成分	系統	FRAC	希釈倍数	使用時期	使用回数
オーソサイド水和剤 80	キャプタン	その他	M04	600~ 1,000 倍	収穫 3 日前まで	9 回以内

※ 上記事例について、令和 2 年 9 月 9 日現在の農薬登録状況を確認しています。また、使用回数はその農薬の使用回数を示していますので、農薬を使用する際には、その剤の使用回数と含有する成分ごとの使用回数に注意します。

※ 農薬散布を行う場合は、事前に最新情報で農薬登録を確認の上、使用します。

※ 隣接園への農薬飛散防止対策を講じます。

※ 収穫後の農薬使用については、翌年の農薬使用回数にカウントされます。

※ オーソサイド水和剤 80 は、石灰硫黄合剤、ボルドー液等のアルカリ性薬剤及びマシン油剤との混用は避けます。

- ・ シンクイムシ類  
被害果は水づけ等により適切に処分します。

### (3) もも

- ・ せん孔細菌病の収穫後の防除  
発生が多い園地では、収穫後の9月上旬から薬剤散布を2週間隔で計3回行います。  
また、適切な肥培管理を行って樹勢回復を図ります。

表4 収穫後に使用するもののせん孔細菌病に登録のある薬剤(一部抜粋)

薬剤名	有効成分	系統	FRAC	希釈倍数	使用時期	使用回数
4-12式ボルドー液	硫酸銅五水塩 /生石灰	無機殺菌剤 /その他	M01	-	-	-
ICボルドー412	塩基性硫酸銅	無機殺菌剤	M01	30~50倍	-	-

- ※ 上記事例について、令和2年9月9日現在の農薬登録状況を確認しています。
- ※ 農薬散布を行う場合は、事前に最新情報で農薬登録を確認の上、使用します。
- ※ 隣接園への農薬飛散防止対策を講じます。

### (4) 共通事項

- ・ 果樹カメムシ類  
管内でも果樹園への飛来が確認されています。  
10月にかけて果樹園に飛来する恐れがあります。定期的に園地巡回を行い、山林に隣接する園地や、過去に被害を受けた園地では特に注意し、飛来初期に防除を実施します。